「よみほん」構成上の一つの型

鈴木敏也

「よみほん」の構成はその初期にあつては短篇集積の「型」を把つてゐる。而してその楔子として主核の同一と云ふ條件が約束されてゐた。即ち怪談とか奇話とか云ふ內質で締め括られてゐるのである。換言すれば、そこには全體を一貫する主人公なるものがない。中にはそれらの「話」を物がたる說話者として、特定の一人物が點出される場合もあるが、それは決して主人公と稱すべきものでなく、作者の代辯者たるにすぎないものである。かかる短篇集積の型式は、夙く假名草子から浮世草子へかけての小說上の一形態でもあつた。而してその一範疇たる怪異小說の系統をそのまゝに繼承する初期讀本がこの型を體現してゐる事は當然の歸結であると云つてよい。

然るに、讀本界に章回體小說が出現した。これは複雜なる機構を整齊するに、人物事件の配置に關して格段に周匝な注意を拂はなければならなかつた。尤もこの點は從來とて、長篇小說の構成には必然的な介意であつた筈である。しかし、こゝで提撕しようと思ふのは、この主人公を圍繞する事件の紛糾と統一とによつて全篇を組立てる普通の長篇小說の事ではない。それは、一方に短篇集積の「型」を把持しながら、同一主人公に繫がれつゝ、最後の破綻なり解決なりを辿るものに就て云爲したいのである。即ち、初期讀本の集積型と盛期讀本の統整型との間に介在する、一つの「型」を展望したいと思ふのであ

る。

例證をもつてするのが捷徑であらう。山東京傳の「本朝醉菩提」の如きはこれに當る。全體としては一休禪師と云ふ高僧外傳の形式を執るけれども、そこには(1)託摩彦惣と香晒の戀愛受難の話。(2)梅津一家の浮沈に關する話。(3)佐々木家の浮沈に絡む名古屋小山三の難苦の話。(こゝに白炭忠知の話がある)(4)酒屋又六の宿命談など、四個の大なる說話層が、(多少の關聯はあるものゝ)、それ〴〵に獨立性を持つて、一休なる一人物に纏結されてゐるのである。しかもその各個の說話層の中には、素材として幾多な說話分子が織込まれてゐるから、一個の說話層だけでもその組織はかなり複雜な機構から成立つてゐる。具體的に云へば正續の「一休咄」を初め、謠曲「山姥」、草子「佛鬼軍」「竹齋」。歌舞伎種の宗玄折琴姬。その他、「堺鑑」「河內國名所鑑」。さては「童唄古實今物語」(短篇型讀本)などから何くれとなく話の種を涉獵し捃摭してゐる。而して一方には野晒悟助と云ふ芝居の種を、こちらからも毒いたのである。たゞ佐々木氏關係の話には一休の投影が直接でないが、これは機構上、精緻ならざるの缺陷を暴露したものであらう。それはともかく、各說話はそれ〴〵獨立性を把持するだけの重要味を抱いて、中軸に繫がれてゐるのである。卽ち一休傳說を中軸として上記の說話層が放射狀に配置されてゐる。この放射型の構成を「よみほん」の持つ一つの型と見たい。

この型は建部綾足の「本朝水滸傳」にも現はれてゐる。惠美押勝を主人公としてゐるが、その說話層には近江の卷、紀伊の卷(伊勢の卷)、北國の卷、關東の卷と順次に配布されてゐる。相互關係が旋轉的に進展するのでなく、一つ一つと取出して置きならべた並列式である。それを操つる絲はあるが、說話層の重味が際立つて、繫がる絲は細い。こゝで放射型と云ひ並列型と呼んだが、それは觀點からの「感じ」の異りから生ずる名稱で、本質上では同一の「型」にすぎない。

これが馬琴の「四天王剿盜異錄」になると、少し趣が變つて來る。この作では碓氷貞光、卜部季武、坂田公時等の生立を敍してゐるが、凶賊袴垂保輔の半生の話の滲透

が繁簡よろしきを得て、貞光等の說話層の獨立性は鮮明に映つて來ない。卽ち說話展開は交錯しつゝ旋回しつゝ漸層的に進捗するので、放射並列の感じは稀薄である。說話層は把捉されても、渾和の域にまで融化してゐる。「八犬傳」の八犬士の點出にも亦同じ手法が用ひられてゐると思ふ。

かう見て來ると、放射型の印象を與ふる章回體の「よみほん」は、構成上、巧緻ならざる程度に彷徨する作品なる事を提示してゐるやうである。事實、本朝水滸傳も醉菩提も、その仕組に就ては相當に文句を插みたい作品である。

もし、構成分子を成す短篇が同一主人公を持つと云ふ以外に、交互の有機的關聯がない作品(例へば西鶴の「一代男」の如きもの)や、或る一人物によつて連結されながら、その人物が全說話の主人公たる役目を演じてゐない作品(例へば漱石の「彼岸過迄」の如き)になると、同じ並列型でも自ら別途を辿るものとしての印象を與へる。この種類の作品は猶、事件の配列、卽ち時間的に觀れば、純乎たる逐次式を把るものを普通とする。これが櫛齒型、連珠型などゝ謂はるゝ所以である。しかるに上述の「本朝醉菩提」型の「よみほん」は逐次式であると共に同時式である。かゝる錯綜的樣式を持つてゐる點にも亦ある距離を認めさせるのである。言葉を重ねて云へば、放射型(並列型)の「よみほん」と、連珠型の作品との距りは、時間的の觀點と各短篇の獨立性の濃淡とによつてその間に薄い障屏を置き得るやうである。

要するに、「よみほん」に見える放射型構成は、集積型の短篇體と統整型の章回體との交錯線上に位する一種の中間型と云ふ事が出來ると思ふ。